

# 指導と評価の一体化」に向けて

2018年度に道徳科の評価が始まってから3年が経過しました。道徳の評価はどのように実施すべきか、どうすれば「指導と評価の一体化」が実現できるか、お悩みの先生もいらっしゃるかもしれません。そこで、本誌では3名の先生をお招きして座談会を実施。その模様を2号連続の特別企画でお届けいたします。

後編では、「指導と評価の一体化」に向け、日々の授業で実施する評価をどのように指導に活かしていくことがよいのかお話しいただきました。



前編では、日々の授業の評価の仕方や、評価の際に大切なことをテーマにお話しいただきました。

## 道徳科の評価4つのポイント

前編の  
振り返り

- 1 学期末・年度末だけでなく、毎時間の評価も大切に！
- 2 授業を通しての子ども一人ひとりの変化を捉え、評価する！
- 3 言葉を使わずに内面を表現できるツールも活用する！
- 4 周囲の人と自分をつなげていける授業づくりにもトライ！

前編は  
こちら



## 「評価」から「指導」へ

**市川**：ここからは、日々の評価を指導につなげていく方法についてお話ししていきたいです。前編でもお伝えしたように、道徳の評価はアセスメントのみですので、日々の評価の中で子どもたちの成長を見取れるような情報を収集することが大切になってきます。たとえば、長岡先生のようにノートを通じて日々の評価をされる先生であれば、授業中に子どもが書いたものを見て、「この子はこういう風に考えたんだ」という気づきを集めることができますよね。

前編では、ノートを通じた評価の話が多かったですが、他にはどのような評価の仕方があるのでしょうか。

**長岡**：ノート以外で評価したいときは、ペアでの交流を積極的に取り入れ、全体での発言が少ない子どもの発言を意識的に聞きに行くようにしています。

発言だけでなく、友達の意見に真剣に耳を傾ける子

どもの様子に気づくことができれば、「仲間の意見に真剣に耳を傾け、考えを広げようとする姿がありました」などと評価することができます。

**谷口**：子どもの様子も気づきになりますね。たとえば、子どもの目線。自分の経験や価値観をもとに考えている子は目線が上を向くことが多く、教材の記述を手掛かりに考えようとする子は下を向くことが多いんです。

**市川**：そうした気づきから授業の内容を振り返って、「もう少し発問を改善しなければいけない」というように、集めた情報を活用して子どもたちへの指導に還元できるとよいですね。



## 授業のねらいは明確に

**市川**：長岡先生は、日々の評価を指導につなげていくために心がけていらっしゃることはありますか？

**長岡**：授業を通して、その子が最初と最後でどう変わったかをしっかり見取れるよう、授業のつくり方や自分の考えの書かせ方を工夫する必要があると思っています。評価にはどのような情報が必要なのか、授業づくりのときから考えていくことが大切だと考えています。

他教科に比べ道徳は、授業を通して何ができるようになればよいのかわかりにくいですね。私は高学年の担任が多いので、授業のねらいもしっかり子どもたちと共有したいと思っています。「多面的・多角的な見方ができるようになろうね」「お話の感想を書くのではなく、自分の生き方につなげていくための時間なんだよ」というように、道徳の授業が子どもたちにとってどういう意味をもつものなのかをしっかりと伝えたいという思いで授業をすれば、子どもたちはそれを踏まえて見つけたことを書いてくれるので評価がしやすくなります。

**谷口**：授業のねらいを明確に示しておくことで、先生が評価をしやすいのはもちろん、子どもたちも自分で自分を評価することができますね。評価の観点が変わらないと、「今日はたくさん発言したな」というような表面的な評価しかできませんが、「自分の生き方につなげる時間だよ」と示してあげることで、じっくり考えたけれども発表はできなかったような子どもも、自分の頑張りや成長をしっかり実感することができると思います。

また、発言はなかったもののしっかり考えたことがノートやワークシートから読み取れたら、次の授業では手を挙げていなくてもその子を指名し、発言の機会を用意してあげるという対応もできるかもしれません。

## 「ノートは私の通知表」

**市川**：実際に、子どものノートから得た情報を指導に活用された経験はありますか。

**長岡**：道徳を学び始めたばかりの子どもたちは、ノートの書き方がわかっていないので、黒板をそのまま写してしまったりお話を読んだ感想を書いてしまったりする子も多いんです。そのような、どうやって道徳に取り組めばいいのか迷子になっている子どものノートを見つけたら、「主人公じゃなくて自分のことを書いてみよう」「自分がわかったことをまとめてみてね」というように方向性を示してあげるようにしています。

また、子どものコメントがあまり深まっていないなと感じたときは、自分の教材研究が足りていなかったときが多いと実感しています。「ノートは私の通知表」という気持ちで評価に臨み、子どもから思っていたようなコメントが得られなかったときには、自分の授業を見直すようにしています。

**谷口**：授業をつかった自分の指導力が子どものノートによって明らかになるということですね。「いいコメントが少なかったな」と感じて終わるのではなく、「ここが理解しにくかったみたいだから、次の授業では説明の仕方を工夫してみよう」というように自分の授業に活かしていくことが必要だと思います。

**市川**：もし子どもの考えがあまり深まっていないことを感じたら、次の授業で「こんな考えが出ていたけどどう思う？」というようにもう一度考える機会を設けてみるのもよいかもしれませんね。ひとつひとつの授業をぶつ切りにするのではなく、過去の授業の評価も活かして継続的に授業をつくっていく。こうしたことがまさに「指導と評価の一体化」につながっていくのだと思います。

## 「指導と評価の一体化」3つのポイント

- 1 授業を通して、子どもの成長につながる情報を収集する！
- 2 授業づくりの段階から、評価に必要な情報を考える！
- 3 子どもの評価と同時に自分の授業も見直す！

